

中田基昭（著）  
『子どもから学ぶ教育学—乳幼児の豊かな感受性をめぐって—』  
2013年 東京大学出版会 A5版 296頁 定価（本体2800円＋税）

南陽 慶子\*

昨今、教育実践と教育研究との乖離の克服は、未だ解決なされぬ課題となっている。本書は、家庭や保育所や幼稚園において日常的に生じている子どもの姿をもとにしながら、乳幼児の活動の彼ら自身にとっての意味について、彼らの感受性の豊かさを具体的に探り描出することを通して、教育実践に密接に関わることのできる教育学の可能性を導こうとするものである。はじめに著者は、乳幼児教育が小学校以降の教育とは異なることについて考察し、子どもが何をどのように学んでいるかを、我々大人が自分自身の体験に引きつけてとらえることが非常に困難であるという、乳幼児教育に特有の問題を指摘する。その上で先の課題を遂行するために、本書では、哲学の一領域であり「日常的には見逃されている人間の生の営みを深く探ること」をめざす現象学の見地に依拠しながら、現実的で具体的な子どもの姿の事例と関わらせつつ教育という営みの個性に焦点を当て、乳幼児教育の本質について論じている。

まず第1章「フレーベルの教育思想から導かれる本書の課題」では、従来の教育思想と乳幼児教育研究に欠けていた教育実践との密接な関わりを具体的に展開するために、本書において、今日の乳幼児教育の現場ではすでに自明のこととされながらも気づかれなくなっていること—例えば、幼児にとっての遊びの重要性が当たり前となることにより、遊んでいる個々の子どもにとっての遊びの意味が見え難くなっている—というように一に焦点を当てる必要性について、フレーベルの言葉を用いて照射している。続く第2章「教育実践のための教育学」では、従来の教育思想と教育研究における問題点を整理し、それらが目指してきた一般性と応用可能性が、その研究によって得られた成果を尺度として、現実の個々で個別な人間を一般的なものの一事例とみなし、表面的な人間理解に陥ってしまうという危険性を指摘している。その上で、従来とは異なる新たな教育研究、すなわち、「一般化によってはこぼれ落ちてしまう偶然的で個別的な出来事」に迫り、一人ひとりの人間を「そのつどの一回的なかけがえのない存在としての実存」としてとらえることによって、個別的なものの根底にある普遍的な本質に出会おうとする教育研究の必要性を強調する。そして著者は、子どもの実存に基づく教育研究の具体例として、ある幼児の絵を描く事例をメルロ・ポンティの言葉の引用とともに描出することにより、現実の個別的な幼児の絵によって哲学における思索の普遍的な本質が明るみにもたらされるという、「解明される事柄自体がその根底に密かに潜ませている本質」が閃き出されるさまを提示してみせるのである。

第3章「乳幼児の感受性と身体」では、乳幼児の豊かな感受性が彼らの知覚能力の豊かさに基づいているということや、こうした感覚の豊かさと鋭さは身体を介した大人との関わりによって育まれるということが、メルロ・ポンティの思索と結びつけられつつ明らかにされている。とくに乳児期においては、養育者がとりわけ意識せずとも、乳児は自ら属している文化や環境に適応するために必要な感覚、運動能力、知覚能力を自然に育んでいく。乳児がこうした能力を育んでいけることについて、著者は、子どもを大人が抱く時の両者の身体活動を例に挙げて論述する。つまり、そこではお互いにとって「楽に抱ける—心地良く抱かれる」というおぎない合いが生じているのであり、「お互いの身体が一つの身体へと組織化されている身体を共に生きる」という出来事が展開しているのだと言う。そして、このような「皮膚感覚的なレベルでの共有を介して育まれる感受性が、それ以後、他の感覚の感受性をおとなと一緒に育むための基盤となる」のだと述べている。そして第4章「意図されていない教育としての家庭における教育」では、フ

\* お茶の水女子大学大学院博士課程

レーベルの着目した家庭生活における認識と行為との循環関係の特質に焦点を当てつつ、家庭における教育の子どもにとっての根源性と、偶然的なことに対する子どもの感受性の豊かさが描出されている。

第5章「乳幼児の他者関係」では、自我が確立する前の子どもの他者関係の特質を「他者とお互いに融け合っている状態」としてとらえてきたワロンらによる従来の研究の成果と課題を素描しつつ、こうした状態を「外の世界への志向的な相互浸蝕」であるとしたメルロ・ポンティの観点に依り、「子どもとおとながお互いにおぎない合いながら呼応し合っている」という状態であると言及している。さらに、フッサールでいうところの「共に意志すること」が、幼児教育において大人に求められるあり方であると共に、幼児の他者関係における感受性の豊かさとしても顕在化されることが具体例によって示される。例えば、物語の登場人物に「なりきる」と通常言われるような幼児の振る舞いについて、著者は、登場人物と「共に意志すること」が子どもたちに生じていると述べ、こうした時の幼児のあり方が「この時期の幼児のいわゆる《単純さ》ではなく、おとなには非常に困難になっているところの、他者に心から応えることや、他者と共に意志することのできる彼らの感受性の豊かさ」として明らかになるのだと論じている。

さらに第6章「園における乳幼児のあり方」では、「意図的な教育の場である保育所や幼稚園」における子どものあり方について、また第7章「園における空間と時間」では、子どもにとっての園における空間と時間の変化について述べている。子どもが保育所や幼稚園といった場へと移行し、そこで集団生活を営めるようになることは、家庭における他者関係のあり方とは異なるということを意味する。ここで著者は、そのあり方の内実を、「みんなのなかの一人の子どもとなる」ということから描き出し、園では空間や時間までもが公共化され、子どもの自由には委ねられていないことに言及している。そして、そうした場において、個々の子どもは、むしろ自らの自主性を能動的に発揮することを暗黙のうちに求められていると論を展開する。

第8章「言葉」では、幼児期に特有の言葉のあり方と、言葉と自我の確立との関係について探っている。本章で極めて興味深いのは、自我が確立する以前の2歳頃から現れる、子どもが二人の人間のあり方へと自分を二重化する活動に、著者が幼児の感受性の豊かさを見出す次のような論考である。2歳頃になると、例えば帰宅した際に「ただいま」と言う代わりに「おかえり」と言うような自分の行為と相手の行為を取り間違えたような言葉を発し、2歳後半を過ぎると、一人で人形遊びをしている時などに一人二役の言葉を話して遊ぶというような、「ある状況を生きている複数の人間の立場を取っている」子どものあり方があるという。一見すると、自分と相手の立場とを混同しているための誤用とみなされる言葉に、著者は、誤用という説明によってはとらえ損なわれてしまう「子ども自身にとっての深い意味」を見出そうとする。さらに、保育所や幼稚園で、カエルなどに近づいて楽しく遊ぶ他の子どもの様子を離れた所で見ていただけなのに、見ている子どもの方が怖がったり、泣き出してしまふ、といったようなしばしば出会われる子どもの姿を例に挙げる。そして著者は、このような子どものあり方の描出によって、「この時期の子どもは、実際には自分が生きていない他者の状況を自分から現実生きることができ」、「自分よりも他者の想いを敏感に感知する」という、我々大人にはすでに失われてしまった乳幼児の感受性の豊かさと鋭さを鮮明に際立たせてみせている。

そして最終章である第9章「遊び」では、現象学の立場からフィンクやガダマーらの思索を導きとして、子どもの遊びの本質や、現実の遊びにおける個々の子どものあり方に迫っている。ここでは、「軽やかさと真剣さ」、「自由と拘束」、「閉じられていることと開かれていること」、「生成と消滅」などといった遊びにおける両義性について具体的に論じるとともに、子どもの遊びにおける模倣と創造力の豊かさについて言及している。そして、「幼児とは、おとなには失われてしまった、こうした両義性を豊かに生きることのできる人間のこと」とであると述べ、そのあり方への礼賛を結語にかえる。

本書で著者は、一貫して乳幼児の感受性の豊かさと鋭さを現実的で具体的な出来事から詳らかにすることを試みている。本書は、乳幼児の感受性の世界の機微に触れる機会に開かれた書であると同時に、現象学に基づいて人間の生の営みをより深く理解したいと考える読者にとっては、その導入ともなる書である。